



瀬戸焼のストーリー

瀬戸焼の物語は、はるか昔…千年以上も前から始まっていたのです。そこから現代へと連綿と続いてきたやきもの産地のストーリー。少し一緒にたどってみましょう。

10世紀 平安時代

瀬戸市域に初めて窯が築かれたのは平安時代後期(10世紀後半)のことです。植物の灰を釉薬にした灰釉陶器が焼かれるようになります。



16世紀 戦国時代

戦国時代になると一度により多くの製品が焼ける「大窯」が登場します。茶の湯の流行も相まって、天目茶碗・水指などの茶陶関係のものも量産されるようになります。



19世紀後半 明治時代

明治時代には、海外で開催されていた万国博覧会へ積極的に出品したことにより、欧米から高く評価され、それを契機に瀬戸で作られたやきものが多く輸出されます。

20世紀 昭和時代

ノベルティや飲食器・タイル・衛生陶器・磚子・理化学用品などの生産が大幅に伸び、輸出を中心として瀬戸のやきものは最盛期を迎えます。

17~19世紀 江戸時代

尾張藩の庇護のもと、日用品を中心にやきものづくりが発展していきます。また、磁祖・加藤民吉が磁器の製法を九州で学び、瀬戸に伝えた19世紀初頭から本格的な磁器生産が開始されます。「世ともの祭」は、この磁祖・加藤民吉の遺徳をたたえる産業祭として開催されています。(開催時期:9月の第2土・日曜)



世ともの祭

現在、最先端技術を駆使した分野への進出など、陶都瀬戸の歴史を未来に向けて繋ぐ努力が続けられています。

◆マップに表記されている📷マークの場所がフォトスポットです。